

明治期翻訳作品における同音・異形・同意漢語

宋 春 玲

要 旨

本文通过对照片版明治翻訳文学全集《翻訳家編》(大空社)の調査, 結合字典調査の結果, 发现同音・異形・同意漢語の形成在一定程度上可以说受中国古代汉语当中的通假字现象的影响。但是还有一部分这类词的形也受同意词的影响。初步认为音和意是对这类词的形起到了决定性的作用。

キーワード……通假字 明治翻訳文学

はじめに

本研究は、明治期における同音・異形・同意漢語について、実際の文献を対象に調査をおこない、それに平安末期から現代にいたる辞書を参照した結果をふまえ、この現象の原因をさぐってみたいものである。明治期が同音・異形・同意漢語の変化が激しい時期であることは筆者がすでにおこなった辞書の調査結果から予想されるところである。

ここでは、明治翻訳文学全集《翻訳家編》(大空社)を調査対象とした。その理由は、このシリーズは明治期に翻訳した作品を影印した(出版されたままを写真版とした)もので、明治期における、実際に漢語が用いられる例をそのまま確認できるからである。現在、様々な出版社によって、明治期の作品が出版されているが、それらはほとんどが現代的に校合済みのものである。例えば、『鷗外全集』(岩波書店)の「後記」に「字体・用字・ルビの有無など適宜に処置されている」とあり、読みやすくなっているが、この研究ではそのような処置は不都合を生じる恐れが高い。そこでここでは影印版を調査することとした。より正確を期すためにはさらに対象を広げる必要があるが、このシリーズを手はじめに調査を進めることとする。

文献調査の結果、辞書の調査と一致する例もあつたが、辞書の調査と異なる例もあつた。この調査結果を以下のように現代日本語の五十音順で並べた

愛嬌・愛敬・愛嬌	愛想・愛相・愛憎
安座・安坐	臆病・憶病
肝心・肝腎	看破・観破
記憶・記憶	形跡・形迹
結構・結構	高座・高坐
強情・剛情	構造・構造
構内・構内	古蹟・古迹
才智・才智	刺激・刺戟

死骸・屍骸・尸骸	賞賛・賞讃
親切・深切	震動・振動
粗忽・疎忽	歎願・嘆願
歎息・嘆息	丹精・丹誠
知恵・智恵・知恵・知慧	
知識・智識	知力・智力
丁寧・叮嚀	当座・当坐
能辯・能辨	悲歎・悲嘆
不思議・不思議・不思議	不愆・不憫
辨解・辯解	辯護・辨護
辨明・辯明	返事・返辞
冥途・冥土	無斬・無惨・無慙・無慚
理窟・理屈	了見・料簡・了簡・料問

以上の用例を通して、同音・異形・同意漢語の変化をあきらかにしようと思う。

—

漢字音が同じで、漢字表記が違い、意味が近い漢語はいつたいどのように成立したのか、まず、先行研究から検討してみる。

武部良明⁽¹⁾は同音・異形・同意漢語について次のように述べた。

「探検・探険」の場合のように、語源的には異なる語と考

えることができる。しかし、日常の言語生活において使い分けているという意識がないことは、「探検・探険」の場合と同じである。したがって、これらの語の場合も異語的同語と考えてよいのである。（中略）

異語的同語の中には、音韻変化によって、類義語から移ってきたものも少なくないのである。（一五一頁～一五六頁）

武部氏は同音・異形・同意漢語を異語的同語と定義し、その成立は音韻変化によると認識している。

池上楨造⁽²⁾は次のように述べた。

字音語 これを漢語と言つてよい 氾濫の問題なのである。話言葉中心の時代ならば、同音語がたまたまできて、自然に一方を避けるといった治療作用を社会は嘗んだのであるが、急にどつと両方の流れが一つになつては処置がない。ここに困ることには、同音で同語が別語かわからないものが字音語には多いのである。ある手近の辞書の始めから拾ってみると、愛敬・愛嬌 委棄・遺棄 異教・異郷 意志・意思 依託・委託（二二頁）

陳力衛⁽³⁾は以下のように述べた。

もともと、同音による漢字表記の代替は中国語の中では頻繁に使われ、古来二つの方向で捉えられてきた。一つは「同音通仮」といつて、同じ発音の漢字を意味的に相通じるものと見て、「蚤」「蚤」「蚤」「蚤」「蚤」「蚤」のように、旧字と新字の相互使用を容認する態度をいうものである。つまり、これ

らの同音異表記は意味が変わらないという大前提のもとで古
文に古くから使われ、古典の知識として受け継がれてきた(中
略)

日本語の場合も、古代からこのような代替が行われてきた。
中国語と同じように、相通するものと、単に当て字として、
代替されたものと分けられる。前者については漢字の意味が
根底から、「栄華物語・栄花物語」「和歌集・和歌集」のよう
に略字による同音代替が可能になる。後者では、「年輩・年配」
「料簡・了見・量見」のように表記の揺れとして挙げられる
ものもある。その代用表記の許容度を過ぎた場合は単に表音
符号と化してしまう。(一〇八頁～一〇九頁)

以上の先行研究からみると、同音・異形・同意漢語の成立は同
音によりできたという認識が多い。

ところで、漢語を研究課題として取り上げるとき、音ばかりで
なく表記される漢字との組み合わせを考える視点も必要ではない
だろうか。この場合、上記のような同音・異形・同意漢語の例か
らは、中国語に昔からある通仮字現象が思い出されるのである。
中国語の通仮字現象は同音・異形・同意漢語の成立に全く無関係
であるうか。いったい、同音・異形・同意漢語はどのように成立
したのか。陳氏が主張する「同音代替」によって成立したのか、
それとも中国語の通仮字現象の影響をうけて成立したのか、その
程度はどれほどか、またほかの影響を受けたものか、文献調査を
すすめ、これらの疑問を解明できるよう試みる。

通仮字については王力(4)は以下のように述べた。

所谓古音通假。就是古代汉语书面语言里同音或音近的字的
通用和假借。(中略)

例如早晨的 zao 这个字本应该写成“早”，但是《孟子·离
婁下》蚤起，施从良人之所之，却写成蚤，蚤的本义是跳蚤，
早晨的早所以写成蚤，只是因为二者声音相同，在记录语言里，
zao (早，早晨) 这个词的时候，早蚤二字通用。(中略)

假借字的形成，根据这样一个原则：语音必须相同或相近。
(中略) 就上面所举的例子来说，早，蚤，唯，惟，维，惠，
慧，由，犹，曾，增，辨，具，俱，舟，周既然完全同音，
自然没有什么可以讨论的。(五四一頁～五四五頁)

(古音通假は古代漢語書き言葉には、同音、或いは音が近い
字を通用し、仮借現象である。(中略) 例えば、「朝」を意味
する zao は「早」で記入すべきであるが、『孟子』離婁下
には「蚤起、施從良人之所之」というふうに「蚤」で記入して
いる。「蚤」の本意は虫の「ノミ」で、朝の意味である「早」
を、「蚤」で記入する理由はただ二者の音が同じだけである。
音が同じであるため、言語を記録する場合、「早」と「蚤」は
通用する(中略)

通仮字の形成には一つの原則として、通仮字となる二字は
音が必ず同じ、あるいは近いということである。(中略) 例を
挙げてみると、早と蚤、唯と惟と維、恵と慧、由と猶、曾と
増、辨と辯、具と俱、舟と周などである。音が同じであるの

で、何も論じる余地がない。）

王力の考え方に従い、『全訳漢辞海』（二〇〇二年 三省堂）で確かめると、本研究対象となる四二組の中に通仮字現象だと考えられる用例は一九組である。それは以下のものである。

臆同憶	億同憶	臆病・憶病	記憶・記憶
構同構			
結構・結構	構造・構造	構内・構内	
坐同座			
安座・安坐	高座・高坐	当座・当坐	
屍同尸、死			
死骸・屍骸・尸骸			
蹟同跡、迹			
形跡・形迹	古蹟・古迹		
贊同讚			
賞賛・賞讚			
歎同嘆			
歎願・嘆願	歎息・嘆息	悲歎・悲嘆	
知同智			
才智・才知	知識・智識	知力・智力	
知恵・智恵・知惠・知慧			
愍同憫			
不愍・不憫			

上記の用例は日本語だけではなく、中国語においても混同して用いられる。まだいくつかの問題点が残り、調査すべきである。それは、これらの通仮字と考えられる用例の現れる時期、現れ方などである。本研究では論じないが、今後の課題として、解明する必要がある。通仮字は一部分の同音・異形・同意漢語に影響したのは確かなことである。しかしながら、通仮字で解釈できない同音・異形・同意漢語も数多くある。本研究はこのような通仮字と関係がない用例を分析しながら、展開する。

一一

注意すべきは通仮字現象だと解釈ができないのに、日本語には通仮字のように使われる用例が指摘できることである。それを明治翻訳文学全集《翻訳家編》の用例を対象にして、あわせて日本の平安末期から現代の各時代の辞書における現れ方を示す。取上げたのはそれぞれの時代において、代表的な辞書で、以下のとおりである。平安末期の『色葉字類抄』、室町時代末期の『古本節用集』（『伊京集』、『明応五年本節用集』、『天正十八年本節用集』、『饅頭屋本節用集』、『黒本本節用集』、『易林本節用集』六種）、『落葉集』、『江戸時代の書言字考節用集』、『節用集大全』、『大全早引き節用集』、『明治期漢語辞書』、『新令字解』、『漢語字類』、『必携熟字集』、『新編漢語字林』、『言海』（吉川弘文館版）、『広辞苑』（第五版）である。

愛敬・愛嬌・愛嬌

『古本節用集・黒本本』

『古本節用集・易林本・饅頭屋本』

『古本節用集・明応本』

『書言字考節用集』

『節用集大全』

『必携熟字集』

『新編漢語字林』

『言海』

『広辞苑』

字面では、全体的な意味に対して、「嬌」と「敬」の働きかけが強いと感じられる。

「嬌」はなまめかしいという意味で、女性に対してよく使う言葉であり、「愛嬌」は女性のかわいらしさを形容する。

「敬」は慎む、敬うという意味である。そこで、「愛敬」は尊敬する意味が入っている。

『言海』は「愛敬」について、「顔色にははげあること」と解

アイキヤウ
有敬

アイキヤウ
愛敬

アイキヤウ
愛敬

アイキヤウ
愛敬

アイキヤウ
愛敬

アイケイ
愛敬
ウヤマフ

ケウカハコラ
嬌
シサ
ケイ
敬
イックシミ
タツトム

アイキヤウ
愛敬

アイキヤウ
愛敬

アイキヤウ
愛敬

釈している。

「愛嬌・愛敬」は『明治翻訳文学全集』には二十回近く登場したが、すべての用例があげられないので、代表として、以下の用例をあげてみる。

太郎兵衛の愛敬が自ら客を惹からである(嵯峨の屋お室 『田舎美術家』)

その愛嬌のある双の鷹も(嵯峨の屋お室 『妖婦伝』)

微笑むとき八愛敬あり(森鷗外 『埋れ木』)

妻は美貌と愛敬とで光ると言ふわけだ(森鷗外 『鰐』)

愛嬌を聞き残して出てゆく様子(坪内逍遙 『雷小僧』)

最も愛嬌ある婦人(森田思軒 『定数』)

仲々愛敬がある(二葉亭四迷 『くされ縁』)

豊類の愛敬のある少しも白粉気のない(三遊亭円朝 『松の操美人の生埋』)

森鷗外、三遊亭円朝と二葉亭四迷の作品においては「愛敬」しか見られなかった。坪内逍遙、森田思軒と草野柴二の作品において、「愛嬌」が使われていた。嵯峨の屋お室の作品の「愛嬌」は珍しい例である。「嬌」はイツワル、ツヨシという意味で、女性の可愛さを形容すると考えられない。また、全体的にみて、わずかに一例だけである。字形は「嬌」と似ている。また、『色葉字類抄』(前田本・人事)により「嬌」で、『色葉字類抄』(前田本・辞字)により「嬌」で、音が一緒であるため、「嬌」の通仮字として、「愛嬌」が用いられたと考えられる。

「嬌」と「敬」の音から考えてみると、『色葉字類抄』（黒川本・豊字）にある「恭敬（キヤウ）」と「嬌（ケウ）」は音がキヤウとケウの違いがある。『韻鏡』により、音を復元してみると、敬は^{キヤウ}で、嬌は^{ケウ}で、音が違うことが明らかである。また、『新編漢語字林』には「嬌ケウ」と「敬ケイ」の区別がはっきり記入してある。中世から近代にかけて、「嬌」と「敬」の音の違いが鮮明である。ここでは、「愛敬・愛嬌」は同じ意味の言葉として使われることは陳氏の「同音代替」という説で解釈できない。

古辞書には、室町時代から江戸時代にかけて、「愛敬」で登場する。明治三七年に出版された『新編漢語字林』は、明治二二年出版された『言海』より一五年間遅れた。辞書によって、明治期において、「愛敬」と「愛嬌」の意味がちよつとずれ、「愛嬌」が遅れて現れてきた。可愛い女には尊い意味がある「敬」より、なまめかしい様を意味する「嬌」を使いたくなる気持は当時の明治の人々にあつたのかも知れない。つまり、この言葉の成立は意味からの影響が強いのではないか。

愛想・愛憎

- 『古本節用集・黒本本・易林本』 愛憎 ^{アイソウ}
- 『古本節用集・伊京集・明応五年本』 愛憎、愛増 ^{アイソウ}
- 『落葉集』 愛想 ^{アイソウ}、愛憎 ^{アイソウ}
- 『書言字考節用集』 「愛憎」又云「無愛想」 ^{アイソウ}

『大全早引節用集』 愛想 ^{アイソウ}

『新編漢語辞林』 愛憎 ^{ソウカハコガルト}、愛想 ^{サツ}

『漢語字類』 愛憎 ^{カハコヒ}、必携熟字集 ^{アイソウ}、愛憎 ^{アイソウ}

『言海』 あいさう愛想、あいぞう愛憎

『広辞苑』 あいそつ愛想、あいぞう愛憎

友は非常に愛相の好い顔をして（森鷗外 『午後十一時』）

頻に愛想をいふうに（坪内逍遙 『雷小僧』）

一際愛憎好く（小栗風葉 『へそ日記』）

私が無愛憎な顔をして居た（小栗風葉 『鬼子』）

相変わらず愛想が善い（二葉亭四迷 『つき草』）

『色葉字類抄』（前田本・人事）による「相サウ」は『色葉字類抄』（黒川本・豊字）による「想サウ」と同音であるため、「愛相・愛想」は混同して使われることが考えられる。「愛想」と同じ意味で「愛憎」の登場が意外である。辞書調査では「愛想」と「愛憎」は意味が異なり、また「想サウ」「憎ソウ」の違いがある。しかしながら、どうして「愛想」と「愛憎」は混同して使うことになったのか考えるべきである。「愛憎」を使う例文は明治三六年に『新小説』に掲載されたものである。明治三三年八月文部省令第十四号『小学校令施行規則中教授用新字音仮名遣に関する規定』によると、

従来用ヒ来レル字音仮名遣 新定ノ字音仮名遣

さつ さぶ そう そー

ざつ ざぶ ぞう ぞー

そこで、「愛想(サウ)」が「愛想(ソウ)」になった。「愛想」と「愛憎」が混同して使われることはこの規定と関係があるかどうか、今後さらに調査を行う必要がある。

一所・一緒

『古本節用集・易林本』一處ソウ 落葉集』 一所シヨ

『書言字考節用集』 一緒イツシヨ 『大全早引節用集』 一所イツシヨ

『言海』 一いつしよ一緒

『広辞苑』 一いつしよ一所 一いつしよ 一緒

この言葉は『色葉字類抄』には現れていない。明治の文献において、「一所・一緒」は以下のように現れる。

潮と一所に寄せてきて(森鷗外 『洪水』)

僕と一しよに往つてみるといふ事が(森鷗外 『戯曲ノ家』)

常茶飯 リルケ 太陽』

急に一緒イツシヨに仕事をすることを拒んだ(森鷗外 『黄金杯』)

僕ぼくと一しよに逃げて下さい(森鷗外 『駆落』)

斯うして一所になりながら(坪内逍遙 『雷小僧』)

お方とは一所に西洋料理へ参りました(三遊亭円朝 『黄』)

薔薇』)

一處いちよに躍をどるとはならんよ(尾崎紅葉 『阿蘭陀芹』)

始終一しじう緒しよに連立つて(小栗風葉 『へそ日記』)

文献調査によると、明治三十年代を境目とし、変化が起こることがわかった。明治三十年代より前は「一所」を中心に使われて

いたが、それ以降、「一緒」が登場し始めた。特に森鷗外の作品において、この傾向を明らかに示している。『明治翻訳文学全集』(翻訳家編)『森鷗外全集』には明治三十年前の森鷗外の翻訳作品を収録し、『森鷗外全集』には明治三十年以降の作品を収録した。『森鷗外全集』には一律に「一所」で現れたが、『森鷗外全集』には「一所」が少なくなり、「一緒」があらわれてきた。「一しよ」は多く鷗外に用いられた。「一所」か「一緒」かどれを使えばいいのか分からなくて、「一しよ」にしたのは森鷗外の悩んでいたところであるかもしれない。ほかの例文も「一所」から「一緒」に変化する傾向を示した。

「緒」はいとずちという意味で、「一緒」は一筋である。『色葉字類抄』(前田本・豊字)に現れる「所縁シヨ・由緒シヨ」によれば、「所」と「緒」は同音で「シヨ」である。「一緒」はともに行動するという意味を担うため、次第に「一所」と同じに使うようになったと思われる。「一所・一緒」は音と意味両方の影響を受けできた用例だと考えられる。

肝心・肝腎

『色葉字類抄』

『古本節用集・伊京集』 肝心カンシン

『古本節用集・明心本・黒本本』 肝心カンシン

『古本節用集・饅頭屋本』 肝腎カンシン

『古本節用集・易林本』 肝心カンシン 『書言字考節用集』

肝心カンシン

『新編漢語字林』
 『言海』 かんじん 肝心
 『必携熟字集』
 『広辞苑』 かんじん 肝心・肝腎
 肝心カンシン
 肝腎カンシン
 翻訳文学全集《翻訳家編》によれば、以下のように使われている。

只お気の毒な事に肝心の馬が見付からない（森鷗外 『戯曲
 馬盜坊』）

肝腎のお旗拳のとき（坪内逍遙 『雷小僧』）

肝腎の当人も居所が解りません（三遊亭円朝 『黄薔薇』）

私の知らうと思ふ肝心の事柄（押川春浪 『新アラビアン
 イト』）

肝腎なら運転機械の上に（森田思軒 『定数』）

辞書の用例と違い、明治期の翻訳作品において、「肝心」より「肝腎」のほうが多くみられる。音を見ると、『色葉字類抄』（前田本・置字）により、「肝心カンシム」で、『色葉字類抄』（黒川本・人体）「腎シン」の区別がある。また、『韻鏡』により、音を復元してみると心は[sim]で、腎は[gen]である。「心」と「腎」は音が違う。これも陳氏の「同音代替」の説で説明できない。

意味から考えると、同じ人間の重要な器官であるため、「肝腎・肝心」が同じ意味で使われるようになったのだろうが。

中国語では「肝心・肝腎」は重要という意味ではなく、たぐらみ、考えという意味である。字面では同じだが、両言語において意味がまったく違う。「肝心・肝腎」は日本人の独自の発想から作ってきた言葉で、意味からの影響が強いと言えるのだろうか。

看破・観破

『必携熟字集』看破ミヌク 『新編漢語字林』看破 ミヤブル
 『広辞苑』 かんぱ 看破

この言葉は、古い辞書と『言海』には現れていない。明治辞書には「看破」という形しか現れなかったが、実際の文献には「観破」も現れた。

渠の鋭利なる眼光は私の包蔵せる何物かを看破せるが如く（内田魯庵 『しきなみ』）

誤謬の有る事を観破したので（嵯峨の屋お室 『私の祖父』）

人の善悪八大抵看破せられるものだと思つた（森鷗外 『玉を懐て罪あり』）

暗黒を看破した（森田思軒 『夢中夢』）

「看」と「観」は同じで、ミルという意味を持つ。現代日本語では音が一緒で「カン」であるが、音を復元してみると、看は[kan]で、観は[kuan]で、音が違う。「看破・観破」の成立は「同音代替」ではなくて、意味の影響が強い。

辞書によると、「看破」は「ミヤブル」という意味を持つが、「ミヤブル」という訓もあるため、和製漢語だと思ひこみやすい。実は、「看破」は中国語でも使われる。『紅樓夢』第百十八回に「看破三春景不長、緇衣頓改昔年粧」とある。これが、いったい和製漢語であるか、純漢語であるか、今後検討を要する。

強情・剛情

これは明治前の古辞書に現れない用例である。明治期の辞書から、登場する。

『必携熟字集』

強情キヤウキョウコ、ロ

『新編漢語字林』

「強」情キヤウセイカウシャウトヨムカタク
シヤウシツカリシ

「剛」情ガウシツカリシ

『言海』がうじやう強情、広辞苑』うじやう強情・剛情

ウ又剛情な素町人め（坪内逍遙 『雷小僧』）

貴方はなぜ強情を張るのですよ（小栗風葉 『へそ日記』）

負け嫌で強情な男ですがな（双葉亭四迷 『うき草』）

アノ強情親父は充分に望むがよい（森鷗外 『戯曲／折薔薇』）

少年の強情で、この度の事をし遂げねばならむ（森鷗外 『俘』）

其の様子は決して強情で隠し通すと言ふ風ではなかった（森鷗外 『黄金杯』）

剛ガウ「強」は同じ強い、硬いという意味である。音からみる

と、『色葉字類抄』（前田本・辞字）によると、『強』キヤウ「剛」ガウまた『色葉字類抄』（前田本・疊字）「強縁カウエン」で、『強・剛』

は歴史から、場合によって同じ「カウ」であることが分かった。音を復元してみると、『強』ガウと、『剛』ガウの違いがある。『類聚

名義抄』によれば、僧上「剛我ウ」僧中「強カウ」であり、同音であることが分かった。『新編漢語字林』には「強」と「剛」

の音が異なることがはっきりと書いてある。

「剛情・強情」は同音からの影響を受けて成立した言葉ではないとは言えないが、意味からの影響が強いのではないか。

刺激・刺戟

これは明治前の辞書には登場しない用例である。『大漢和辞典』にも現れていない。『角川大辞源』に和製漢語と指摘された。

『必携熟字集』

刺戟シゲキシヤマ、新編漢語字林 刺戟シゲキイラダテル

『言海』 しげき 刺激 『広辞苑』 しげき 刺激・刺戟

神経を刺戟せられずにはゐなといふ事は（森鷗外 『午後十

一時』）

石のから鳴るのがいやに人を刺戟する（森鷗外 『午後十一時』）

「刺戟・刺激」はよく文献に現れる用例ではない。二例しかなかったが、森鷗外の作品において、「刺戟」という形で登場した。

『類聚名義抄』法上により、「激」と「撃」は音が同じで、『色葉字類抄』（前田本・雑物）により、「撃ケキ」「戟ケキ」と示される。そこで、「激」と「戟」は同音であることが分かった。意味は「戟 矛」「激 激しい、はやい」の違いがあるため、この用例は、同音より成立した言葉だと考えられる。

この言葉に関しては、さらに調査を行う必要があるが、辞書の調査結果と一致し、明治期には「刺戟」が広く使用されることが明らかになった。

親切・深切

『古本節用集・明応五年本・黒本本』

『古本節用集・饅頭屋本』

『落葉集』深切

『新編漢語字林』

『必携熟語字集』

『言海』

『書言字考節用集』

『親切』

『深切』

『深切』

『深切』

明治時代には「親切・深切」は同じ言葉として扱われた。

『小栗風葉』

『へそ日記』

『坪内逍遙』

『雷』

『三すぢの髪』

『へそ日記』

『くされ』

『戯曲折』

『森鷗外』

『飛田良文・佐藤武義』

『深切』

『深切』

『深切』

『深切』

『深切』

『深切』

く字義を想定することができにくかったため、「親」が「し

だし」の訓を有し、かつ「深切」に類縁の語義を示す。「親

呢」等との近縁性に着目し、識字層が拡大した中世後期に

入ると、節用集、『運歩色葉集』が「親切」に変更している。

しかし、近世においては、伝統的な「深切」を用いること

が一般であり、明治に入っても「深切」が明治三十年前後

まで用いられているが、それ以降は「親切」に移行したと

見られる。（一五〇頁）

「深切・親切」は明治三十年代に変化が起きたという指摘は

本研究に一致する。『色葉字類抄』（黒川本・人事）によると、

「親」で、『色葉字類抄』（前田本・辞字）によると、「深」であ

る。音が一緒である上、「切」と繋げて考えるべきだと思ふ。「切」

は「近づく」「ぴったりと密着する」の意味がある。「親しく近

づく」か「深く近づく」かどれも「しんせつ」の意味に通ずる。

「深」と「信」は類義語ではないが「切」と一緒に使うと、同

じ意味を持つようになった。「親切・深切」が混同しても本来の

「しんせつ」の意味が表現できる。辞書の用例と同じで、「親切・

深切」が混同して使われた。

振動・震動

『色葉字類抄』震動 シントウ 『古本節用集』震動

『書言字考』六種震動 『新編漢語字林』

『振』 『動』

『震』 『動』

『動』

『広辞苑』 たんせい 丹誠・丹精

百方丹精たんせいといたしても（尾崎紅葉 『三すぢの髪』）

折角丹誠せちかくたんせいして、縫上た襦袢を何もお切なさる（嵯峨の屋お室

『私の祖父』）

男の手では丹精たんせいがえれへ私等は未だ無ね（三遊亭円朝 『黄

薔薇』）

御丹誠ごたんせいを願ひます（三遊亭円朝 『黄薔薇』）

「精」は心で「誠」はまことという意味である。『色葉字類抄』

（黒川本・豊字）によれば、「丹誠たんせい」で、『色葉字類抄』（前田本・

人事）によると、「精せい」で、「誠・精」は同音である。『類聚名義抄』

法下には「精者ウ」、法上には「誠シャウ」になっている。音はセ

イではないが、同音であることをしめしている。

「丹誠・丹精」は音および意味両方の影響を受けてできた言葉
だと言ってもいい。

丁寧・叮嚀

『色葉字類抄』

丁寧テイネイ

『古本節用集・伊京集・明心本・饅頭屋本・黒本』 丁寧

『古本節用集・易林本』 叮嚀

『大全早引き節用集』

叮嚀テイネイ 叮嚀ねんじょう

『漢語字類』

丁寧テイネイ 丁寧テイネイ

『必携熟字集』

丁寧テイネイ

『新編漢語字林』

丁寧テイネイ

『言海』 ていねい 丁寧・広辞苑』 ていねい 丁寧・叮嚀

女学士の前で丁寧テイネイに拝礼として（森鷗外 『玉を懐て罪あり』）

丁寧テイネイに問はれた義理か（森鷗外 『戯曲折薔薇』）

丁寧テイネイに鼻をかむ（森鷗外 『午後十一時』）

随分叮嚀テイネイに取扱ひますやうに（尾崎紅葉 『三すぢの髪』）

今朝余程丁寧テイネイに私を待遇した（嵯峨の屋お室 『田舎家』）

叮嚀テイネイなお武士だと思つて（三遊亭円朝 『松の操美人の生理』）

丁寧テイネイに一礼を致します（三遊亭円朝 『名人長』）

黙つて丁寧テイネイに辞儀した（草野柴一 『猶太人』）

礼儀正しいという意味に使うとき「丁寧」のほうが「叮嚀」

より多く使用されることがあきらかである。この言葉は中国で

も使われる。その場合、「丁寧」は「叮嚀」より意味が広い。ネ

ンゴロという意味で使う場合だけ意味が一緒である。日本語の

礼儀正しいという意味はない。「丁寧」は古くから使われ、明治

時代には共存していたことは文献調査に示された。明治三十年

前後に「叮嚀」は使われなくなつてしまつたようである。

不思議・不思議

『古本節用集・明心本・饅頭屋本・易林本』 不思議フシギ

『古本節用集・黒本本』 不思議フシギ 『落葉集』 不思議フシギ

『書言字考節用集』 不思議フシギ

『大全早引き節用集』 不思議フシギ

『新編漢語字林』 「不」フ 思議シギ ノツカヘ

可思議カシギ 上

『言海』 ふしぎ 不思議 『広辞苑』 ふしぎ 不思議

其不思議なる巨人の贈本を緋けば(内田魯庵 『巨人談』)

不思議と命を拾った人(森鷗外 『玉を懐て罪あり』)

知らぬ人の顔不思議をそうに見て(森鷗外 『黄綬章』)

不可思議な神々(森鷗外 『俘』)

不思議ぢやないか(森鷗外 『戯曲馬盜坊』)

始は不思議な御縁で何かを言つて(尾崎紅葉 『手引の糸』)

不思議と云へば不思議で(小栗風葉 『鬼子』)

相違ないハテサテ不思議な処で手に入る(坪内逍遙 『雷小僧』)

僧』)

一種不思議の貌だち(坪内逍遙 『印度太子舍摩の物語』)

不思議の物語は思ひいづる(森田思軒 『一九年』)

「不思議」は現れる頻度の高い言葉である。ここではすべての用例が挙げられない。「不思議」が入る例文を適当に省略したが、それ以外に「不思議」「不思議」を使う用例をすべて挙げた。

現代日本語には、怪しいことを表現するとき、「不思議」を使うことは普通だが、戦前には「不思議・不思議」も使われた。漢語熟語「不可思議」から作り出された「不思議」は本来「議」を使うべきである。『色葉字類抄』(前田本・人事)によれば「義・議・儀」は同じ項目に現れ、音が同じ「ギ」であり、且、形も似ているため、「不思議」と同じで、「不思議」「不思議」を使つても、大丈夫だったようである。これは明らかに音より影響をうけ、できた用例である。

返事・返辞

『古本節用集・饅頭屋本・易林本』 返事

『落葉集』 返事 『大全早引節用集』 返事

『新編漢語辞林』 [返] 辞(シカヘシ) 事返

『言海』 へんじ 返事・返辞 『広辞苑』 へんじ 返事・返辞

辞書の用例により、「返事・返辞」は明治期から、今日にいたるまで混同して使われてきた。明治期の実例の用例は以下のようになる。

色好い返辞を今こゝでとしなだれか(坪内逍遙 『雷小僧』)

一向返事がない餘り(三遊亭円朝 『黄薔薇』)

お返辞の致し様もなき(森田思軒 『貧富』)

好まぬもの、如くなま返辞をした(嵯峨の屋お室 『妖婦伝』)

貴君のお返詞を伺つた上と(森鷗外 『玉を懐て罪あり』)

私も何か返事を致しました(森鷗外 『戯曲折薔薇』)

「返事」は中国語にはない。これが日本人独自の発想で作つた和製漢語である。「返事・返辞」はよく用いられる言葉であるので、用例が多くあつて、すべて挙げられない。典型的な例文を挙げてみた結果、辞書に現れる傾向と一致する。明治期には「返事・返辞」は両方とも同じ意味として使われた。森鷗外の作品により、「返詞」を混同して用いられた。森鷗外の作品は一つの言葉を一貫して使う傾向があるから、「返詞」を使うのは非常に例外的である。「辞」と「詞」は通仮字であるので、漢文の

教養の高い森鷗外はここで「返詞」を使ったのかもしれない。

冥土・冥途

『色葉字類抄』 冥途メイト 『古本節用集・易林本』 冥途

『書言字考節用集』 冥途 『大全早引節用集』 冥途

『新編漢語字林』 『冥』
トヨコ
トヨ

『言海』 めいど 冥土 『広辞苑』 めいど 冥土・冥途

明治翻訳文学全集《翻訳家編》には二例しかみられない。以下
のようである

冥土の旅へおもむきまして(坪内逍遙 『雷小僧』)

腮を明いた冥途の口に(小栗風葉 『へそ日記』)

『色葉字類抄』(黒川本・豊字)により、「冥途メイト」『色葉字
類抄』(黒川本・地儀)により、「土」で「途・土」は音が同じ「ト」
である。「途」と「土」の意味が違うため、「冥土・冥途」は同音
により変化してきた言葉だと認識が出来るのであるうか。

二例だけでは、「冥土・冥途」の変遷ぶりが解明できない。しか
し、明治期において「冥土・冥途」両方とも使用することが判明
した。

無残・無慚・無慙・無慙

『色葉字類抄』

無慙
ムサン

『古本節用集・饅頭屋本・易林本』 無慙

『書言字考節用集』 無慙

『必携熟字集』 無慙

『新編漢語字林』 『無』
残

『言海』 むざん 無慙

『広辞苑』 むざん 無慙・無慙・無残・無慚

辞書調査によると、「無慙」が最も古く使われた形である。明
治期に残酷なこと、いたわしいことを表現するとき「無慙」か
「無残」を使った。文献に使われる状況は以下のようである。

無残な一情ない罪のないオリブイエー(森鷗外 『玉を懐
て罪あり』)

国会の椅子のみなりしに、あな無慙や(森鷗外 『女丈夫』)

餘りにも無慙に候はん(森鷗外 『やまひこ』)

哀れむべき事無残なること(坪内逍遙 『雷小僧』)

無慙の最後を目の前に見る(坪内逍遙 『雷小僧』)

覗いて見れば、無残や書生輩が寄った(三遊亭円朝 『黄齋
微』)

今夜無慙の最後を遂げるか(押川春浪 『新アラビヤンナイ
ト』)

「慚」と「慙」は異体字であるため、「無慙」が使われること
は理解できる。無慙は『色葉字類抄』(黒川本・辞字)により、
「ムサン」であり、「慚」は『色葉字類抄』(前田本・人事)に
より「サム」であり、「残」は『色葉字類抄』(黒川本・辞字)

により音が「サン」であり、音が近い。また、共に「惨め」という意味を持つ。そこで、「無残・無惨・無慚・無慙」を混同して用いられる理由が分かった。これも音と意味両方とも作用して、出来た言葉だと考えられる。「無惨・無慚」の「無」には否定の意味がない。後に用いた「残・惨・慙」は意味的に働きかけをするという点で極めて珍しい例である。

理窟・理屈

『落葉集』 理窟 『書言字考節用集』 理窟

『大全早引節用集』 理窟 『必携熟字集』 理窟

『新編漢語字林』 理窟

『言海』 りくつ理窟 『広辞苑』 りくつ 理窟・理窟

この用例は『色葉字類抄』に現れていない。

どちらへもつかぬ理窟をきいてやるときもあらう(森鷗外)

『戯曲折薔薇』

慰みになるといふ理窟はないといふ(森鷗外 『戯曲馬盗坊』)

一命を失ふ理窟はないといふ(森鷗外 『ミットメンシユ』)

わかりもせぬ理窟に走らうとした(小栗風葉 『へそ日記』)

理窟が巧えから佳い智恵を貸してください(草野柴二 『喜

戲艶舌魔』)

また理窟を絡んだ(二葉亭四迷 『親こゝろ』)

そんな理窟ッてはない(二葉亭四迷 『酒袋』)

中国語の場合、『漢語大詞典』には「理窟・理窟」両方とも載っ

ている。「理窟」は「理がない」という意味で、これに基づいて「理窟窮」という熟語ができた。「理窟」は「わけ、すぢみち」という意味で、晋時代の例文がある。(帝詔語、歎曰、張憑勃為理窟。晋書・張憑伝)これは中国語において、古い用例である。

辞書調査によると、日本語では「理窟」が最も古く使われた形である。特事のすぢみぢ、こじつけの理由」という意味に変わり、さらに、『類聚名義抄』(法下)により、「窟クツ」で、『色葉字類抄』(前田本・壹字)により、「窮屈クツ」で、「窟・屈」は音が一緒である。明治期に入り、「理窟・理窟」が共に用いられたと考えられる。この言葉は同音であることから作られた言葉ではないだろうか。また、中国語の「理のない」という意味から、日本語の「理を立てる」という意味に変化するのがこの言葉のおもしろいところである。

了見・料簡・了簡・料間

『色葉字類抄』 料簡 レウケン

『古本節用集・伊京集』 料簡 了簡

『古本節用集・明心本』 料簡 了簡

『古本節用集・黒本本』 料簡 了簡

『古本節用集・易林本』 料簡 了簡

『古本節用集・饅頭屋本』 料簡 了簡

『古本節用集・明心本』 料簡 了簡

『書言字考節用集』

料簡レウケン 集語 八度也 了簡レウケン 集語 八度也 出後漢書

『必携熟字集』

了簡レウケン ハッキ
料簡レウケン ハカリ

『新編漢語字林』

了見レウケン ミチハル
料簡レウケン ミソモリ ヲツケ、イラム

『言海』

れうけん 料簡・了簡

『広辞苑』

りょうけん 料簡・了簡・了見

かく迄おのれが了簡を遠ざけんとせらるる（森鷗外 『俘』）

己の料簡れうけんで己おのれが盗んだ（森鷗外 『戯曲馬盜坊』）

何という了簡だらう（尾崎紅葉 『三すぢの髪』）

如何しやうと言つ了管などは無いのだらう（尾崎紅葉 『阿

蘭陀芹』）

御料見を武「イヤ、其許……」（三遊亭円朝 『松の操美人の生

埋』）

不信心な量見りょうけんがあつた（三遊亭円朝 『名人長二』）

了簡れうけんが間違まちがつてゐた（双葉亭四迷 『うき草』）

「料簡・了見」について、中田祝夫（7）は以下のように記している。

つまり、「料簡」と記すのが漢籍・仏典の字面で、それが後になって、「了簡」「了見」といった文字に変わっていった。（二六九頁）

「料簡」は『漢語大詞典』によると、「選ぶ」と「徹底に整理し、検査する」という意味がある。辞書調査によれば、日本語では「料簡」が最も古い形である。『色葉字類抄』（黒川本・疊字）「料」と

『色葉字類抄』（黒川本・重点）「了」は音が同じ「レウ」である。

次第に、「了簡」が現れ、「料簡」と同じ使つようになったと想定できる。『色葉字類抄』（黒川本・疊字）により、「見過ケン」「料簡ケン」「見」「簡」の音は同じで「ケン」であるため、「料見」「了見」も使われるのが理解できる。この用例は同音の影響によりできた言葉だと認識できる。

三

以上の文献調査を通して、同音・異形・同意漢語をめぐって、以下のことが分かった。

イ 一部の同音・異形・同意漢語は通仮字の影響を受けて成立したことが明らかになった。「嘆息・歎息」「臆病・憶病」のような言葉は多くの日本人と日本語学習者を戸惑わせる。実はこれは中国では古くからある現象で、通仮字と呼ばれている。「通仮字」は通例では中国語を研究する場合使う用語であり、この用語で日本語の現象を説明してもいいか。それとも、別に適切な用語を作り、この現象を解釈するのか、今後国語学者によって論争される焦点になると予想できる。

ロ 通仮字と関係なく、成立した用例もある。これらの用例の変化したパターンは以下のとおりである。

ア 同音・異形・同意漢語を構成する要素は同音である理由で成立した用例は五組ある。それは「不思議・不思議 冥途・冥土 返事・返辞 理窟・理屈 料簡・料見・了見」である。これらの用

例は殆ど和製漢語で、日本語においては、同音であり、中国語において四声が違う場合があるが、発音がだいたい一緒である。通仮字のように日本人に使われてきたが、和製漢語なのであまり注目されてこなかった。この類の用例は通仮字だと言えるかどうかさらに論じるべきである。

イ意味の影響を受けて出来た用例が三組ある。それは「愛嬌・愛敬 肝心・肝腎 看破・観破」である。研究対象になる漢字は音が日本語においても、中国語においても異なる。これが陳氏の「同音代替」の説で説明できない。この類の言葉は意味が同じあるいは近いいため、成立したと考えられる。

ウ音と意味両方に影響をうけてできた用例が六組である。これは「一所・一緒 強情・剛情 粗忽・疎忽 振動・震動 丹誠・丹精 無慙・無慚・無惨・無残」である。この類の漢語には純漢語もあるし、和製漢語もある。例えば、「丹誠」は純漢語で、「丹精」は和製漢語である。したがって、純漢語が先に成立し、その後、音と意味の影響を受け、同音・異形・同意漢語が成立したのが今後の課題としてさらに論じる必要がある。

エ特殊な例が三組ある。「愛想・愛憎 親切・深切 丁寧・叮嚀」この三組はすべて、明治三十年代において、変化が起こった用例である。

ハ 辞書調査によると、明治期は同音・異形・同意漢語の変化が活発に見られる時期である。そのなかには、明治三十年代を境目となることが本研究により明らかになった。「愛想・愛憎」一

緒・一所 親切・深切 叮嚀・丁寧」は明治三十年代を境目として、変化が起こる用例である。これ以外、もつとあると予想できるが、今後の課題として、調査対象を広げて解明すべきである。

終わりに

実際の文献調査によると、同音・異形・同意漢語の成立は単に通仮字の影響を受けてきたとは言えない。意味の影響も受けている。また、音と意味両方影響を受けて成立した用例もある。今後の課題として、以下の問題を明らかにする必要がある。

- 一、 明治三十年代を境目として変化が起こる用例を調べる
こと及び明治三十年代が境目となる理由。
- 二、 「刺戟・刺激」「冥途・冥土」の明治期の実際文献における用例をさらに調査すること。
- 三、 明治期の文献と仏典を幅広く調査すること。

注

- (1) 武部良明 『日本語の表記法の課題』(一九八一年 三省堂)
- (2) 池上禎造 『漢語研究の構想』(一九八四年 岩波書店)
- (3) 陳力衛 『和製漢語の形成とその展開』(二〇〇一年 汲古書院)
- (4) 王力 『古代漢語』(修訂本 第二冊) (一九八一年 中華書局)
- (5) 飛田良文 佐藤武義 『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』(平成一四年 明治書院)
- (6) 森岡健二 『改訂近代語の成立・語彙編』(平成三年 明治書院)
- (7) 中田祝夫 『日本の漢字 日本語の世界4』(昭和五七年 中央公論社)

調査文献

- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》1 三遊亭円朝集（大空社、明治二〇年）
 明治二〇年『欧州小説／黄薔薇』、明治二二年『松の操人の生埋』、明治二八年『名人長二』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》3 井上勲集
 明治一三年『九十七時間二十分間／月世界旅行』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》4 坪内逍遙集
 明治一三年『春風情話』、明治二五年『雷小僧』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》5 森田思軒集
 明治十九年『印度太子舍摩の物語』、明治二〇年『貧富』、明治二二年『夢中夢』、『定数』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》8 森鷗外集
 明治十八年『盗侠行』、明治二二年『玉を懷て罪あり』、明治二二年『戯曲折薔薇』、明治二三年『埋れ木』、明治二四年『黄綬章』、明治二五年『女丈夫』、『俘』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》9 森鷗外集
 明治三五年『やまひこ』、明治三九『ウント、ピツパ、タンツト』、明治四〇年『ミットメンシユ』、明治四一年『黄金杯』、明治四二年『戯曲／家常茶飯 リルケ 太陽』、明治四三年『午後十一時』、明治四五年『駆落』、『鱧』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》10 双葉亭四迷集
 明治三〇年『うき草』、明治三二年『親こころ』、明治三二年『くされ縁』、明治三二年『酒袋』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》12 尾崎紅葉・小栗風葉集
 （尾崎紅葉編）明治二六年『三すぢの髪』、明治三一年『手引の糸』、『阿蘭陀芹』、（小栗風葉編）明治三八年『へそ日記』、明治三九年『鬼子』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》13 内田魯庵・嵯峨の屋お室集
 （内田魯庵集）明治二六年『巨人談』、明治二九年『しきなみ』、（嵯峨の屋お室集）明治三三年『田舎美術家』、明治三四年『田舎家』、明治三五年『私の祖父』、明治三六年『妖婦伝』
- 明治翻訳文学全集《翻訳家編》19 草野柴二／押川春浪集
 （草野柴二集）明治三七年『喜戲艶舌魔』、明治四一年『人間伝』、『猶太人』、（押川春浪集）明治三六年『新アラビヤンナイト』

調査対象辞書

- 『色葉字類抄研究並びに索引』（中田祝夫・峰岸明、風間書房、一九七七）
 『古本節用集六種研究並びに総合索引』（中田祝夫、風間書房、一九七九）
 『慶長三年耶蘇会板落葉集本文・解題・索引』（京都大学文学部国語国文研究室編、京都大学国文学会、昭和三十七年十月十五日）
 『書言字考節用集研究並びに索引影印編』（中田祝夫、風間書房、一九七九）
 『恵空編節用集大全研究並びに索引篇』（中田祝夫、勉誠社、一九七五）
 『大全早引き節用集』 天保癸卯（一八四三年）鑑定
 『漢語辞書四種総合索引』（松井栄一・木村晟、大空社、一九九七）
 『言海』（大槻文彦、古川弘文館、一八九一）
 『日本語大辞典』（第二版）（講談社、一九九五）
 『広辞苑』（第五版）（岩波書店、一九九八）

主指導教員（船城俊太郎教授）、副指導教員（大石強教授・井村哲郎教授）